

Field-Experienceで学生は進化する

—『レファレンス演習』と学生からの?—

斎 藤 文 男

0. はじめに

筆者は明治の『レファレンスサービス演習』でも、三多摩レファレンス探検隊（以下、「三多摩レファ探」と略す）が開発した「調査プロセス比較法」を用いている。この2年間4期で約160名の学生達と実践体験（Field-Experience）を楽しんできた。

本稿では、この間に表出した履修学生の素朴な疑問・感想を「現場効果」として再現し、明治大学図書館（駿河台）の資料排架法（いわゆる「棚づくり」）を論ずる。なお、明治の『レファレンスサービス演習』授業の事例報告は既に発表¹⁾と文献²⁾がある。

1. 三多摩レファ探と調査プロセス比較法

三多摩レファ探^{3)~8)}とは、1994年から続いている東京・多摩地域の公立図書館員を中心とした、私的で自由な実践的レファレンス研鑽会である。

1-1. 探検する図書館員

レファ探は次のように進行する。

- ①実際に公立図書館の現場であった「レファレンス質問」が配布される。
- ②自館やシステム内の図書館資料・ツールで調査・探索し、回答に至るまでの調査プロセスを端的に記録する。
- ③事務局に集約した各自の回答に、コメンテーター（質問提供者）からの簡単なアドバイスを朱で記入される。コメンテーターは質問別の総括コメントも作成する。
- ④事務局はそれを『回答&コメント集』に編

集・割り付け・印刷・製本し、郵送などで全員に配布する。

- ⑤ひとつのレファレンス質問に多様な調査プロセスと回答事例が並ぶ『回答&コメント集』を参加者は熟読・比較して、自分の弱点・自館の品揃えの不備・新しい調査戦略・未知のレファレンスブック等を認識・吸収する。
- ⑥2ヶ月毎にセットされている検討会に参加し、討議の中から更なるレベルアップを目指す。（会場を提供した図書館の資料や職員と「顔見知り」状態となる）

1-2. 調査プロセス比較法の核心

前節の⑤、同一レファレンス質問に対して個性とプロセスの異なる調査プロセスが並ぶ『回答&コメント集』が、この調査プロセス比較法の中核である。

参加者同士の調査プロセス・回答提示の記録がならぶ。調査手順、典拠資料、それによる判明事項等の比較検討が容易である。調査した職員名と図書館名も明記してある。この『回答&コメント集』をじっくり読み込むことで、自他の探索戦略確立能力・図書館資料の把握力・調査スキルの未熟さ加減が明確となる。調査の基礎である自館の蔵書形成の欠点も証明されてしまう。現役の公立図書館職員としては、これが最も「切ない」体験であろう。こういう体験が司書魂をゆり動かすのである。この「切ない」体験は、選書の際にレファレンスを念頭におくことになったり、追加購入に活かされたり、また更なるレファレ

ンス・スキルの修得へと向うのである。

1-3. 調査プロセス比較法の効果

調査プロセス比較法が現役に与える効果は沢山ある。レファレンスサービスは資料提供という機能を実現するための手段・方法だからである。手段・方法だから技術と能力は実際のケースから学ばざるを得ないのである。

調査プロセス比較法の効果は、自問自答的に解釈すると、次の3点に集約できる。

- ①自他のレファレンス能力の比較が容易→「同じような経験年数なのに、どうしてこんなに違った結果になるの!？」→サービス現場の資料・ツールを使つての、現役図書館職員の調査プロセス比較なので、読む人側の意識と経験に応じた結果が読み取れる。
- ②自館の蔵書レベルと他館のそれを比較することができる→「同じくらいの蔵書冊数なのに、何故にアレやコレが無いの!？」→自館と他館とのコレクションの差が実感できる。さあ、どうしよう?
- ③調査プロセスを比較するためには、レファレンス記録(調査メモでもよい)を端的に残す必要がある。→「レファレンス記録って、やってみれば簡単だね!」→合理的な調査メモを体得できる。

2. 明治大学における『レファレンスサービス演習』授業

1章で明らかにした調査プロセス比較法の効果を、養成現場活かすために以下のバージョンとした。

2-1. 授業(実践演習)の目的

公立図書館の現場で実際にあったレファレンス質問を使用し、その調査回答処理(質問の分析、調査戦略の確立、調査実行、回答提示の実際、調査メモの作成、その活用等)を明治大学図書館で体験させ、基本的参考図書理解とレファレンス実践能力の向上を図ることを目的とした。更に、全員の演習結果は

質問別総括コメントと共に『明治大学レファレンス演習・回答&コメント集』(A4判、横、両面縮小印刷、18~36ページ)として固定され、次週の授業前半の検討材料となる。それを検討する過程で、自分が調査していない5~8質問についても、調査プロセスの理解と共有化を図った。

理解・修得してもらいたい具体的な事項は、シラバス及びガイダンス時に次の7点を求めた。

- ①基本的レファレンスブックの理解
- ②利用者が質問しやすい(司書の)態度・行動様式の理解
- ③質問応答(Question-Negotiation)の実際
- ④レファレンス質問の分析トレーニング
- ⑤調査戦略の確立トレーニング
- ⑥回答提示の実際
- ⑦レファレンス記録(調査メモ)の実際

2-2. 授業の進行

毎回の授業パターンは表Iの通りである。授業(90分)の前半45分は、前週の演習で提出した調査メモを検討する。学生には『回答&コメント集』と各自の調査メモ用紙(朱でコメント付き)を配布する。

後半の45分は、明治大学図書館の開架フロアにて、指定されたレファレンス質問について調査し、その成果をメモする。使用できる資料・ツールは明治大学図書館が用意している全てを使える。「山の手線コンソーシアム」や商用データベースもOKである。

レファレンス記録(調査メモ)を毎回提出する。最後の10分で、独自メモから調査メモに仕上げる。提出した学生のみ出席として認める。

〔表Ⅰ〕授業進行

〈授業開始〉――→		――→〈終了〉	
0分	45分	45分	80分 10分 90分
前週に調査回答した事例を『回答＆コメント集』を材料にして検討。適宜現場での実際を紹介する。		大学図書館の開架フロアにて調査。プロセスや成果を独自メモとして記入する。	調査メモに仕上げる。

3. 先生、明治の図書館って、調べやすいのかしら？

実践演習が中盤にさしかかる（6～7回ごろ）と、章題の意味の質問や感想が必ず寄せられる。調査中にフロアで、あるいは休憩時間中に。

これらは、ようやく調査者としての覚醒が育ってきている証拠で、短時間ながら集中して解説するが、でもやはり不満顔ですね。筆者も不満なんです。

2年4期の実例では、次の5点（件数の多い順）に大きくジャンル別けできよう。

その1－分類番号3ケタの怪！

その2－資料補充力不足（？）の怪？

その3－OPAC検索力の精度に？マーク

その4－書誌書目類別置の怪

その5－デジタル移行資料に案内がない怪

3－1. 分類番号3ケタの怪！

明治大学図書館の請求番号は、驚くべきことにNDC3ケタ分類（「目」までの展開）で始まる。ラベル2段目は数字なので同一分類中の受入番号順のナンバーであろう。利用者が自由に資料を手にする開架図書も同じである。分類が3ケタまでの展開という、公立図書館では児童資料とか、規模のごく小さい分室ぐらいであろう。100万冊以上を所蔵する大学図書館では、閉架書庫内の排架はいざ知らず、開架では利用者対応ができないはずのものだ。

学生からのブーイングが多いのは8門である。

たとえばNDC813〔辞典〕。4ケタ（細目）まで展開されないの、（取り扱っている内容やジャンルに関係なく）日本語の辞典が受入順（つまり古い順）に書架に並んでいる。813止まりの辞書が20棚以上に受入順で並んでいる。つまり、国語辞典・漢和辞典・故事熟語辞典・慣用語辞典・古語辞典・新語辞典・流行語辞典・俗語辞典などが、なんの脈絡も無く同じグループとして受入順に排架されているのである。どうです？「ことば」を調べる時にこんな書架の前に立ちたくないですよネ！『広辞苑』で調べたあと、『日本国語大辞典』や『新明解国語辞典』も手にしたい時には、（国語辞典の群が形成されていないから）20棚以上ある813の書架を探しまくるハメになる。

履修学生による現実的解決策：（100万冊の分類訂正はムリだろうから……）分類は3ケタのままで、4ケタ（細目）の働きを「書架ガイド」で代用する、という案。つまり、書店の文庫棚に「赤川次郎」とか「パーカー、ロバート・B」などの著者ガイドを挟んで各人の著作を集中させる類（たぐい）。

813でいえば、「813.1 国語辞典」というガイドを立て、そこに813に散じている国語辞典を集中させる。次に「813.2 漢和辞典」のガイドのもとに、諸橋大漢和をはじめ漢和辞典を集中させる。順次そのようにすれば、

実質上4ケタ分類（細目までの展開）が書架シフトに表現されることになり、利用者＝学生には都合が良いし、開館しながらの移行作業も可能だろう、というもの。

至極もったもな対応策である。

3-2. 資料補充力不足(?)の怪

これは学生達の調査メモ（レファレンス記録）からも判明していた。直接質問に来た学生（複数）は、自分たちの努力の結集である『参考図書解題』の解説と、本棚にある冊数が違う、という表現が多い。

①『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』の一部が用意されてなくて、調査結果が▲となったもの。『REOスピードワゴンというロックグループの雑誌記事のリストはないか?』という質問。大宅の1888-1987追補版が用意されていないので、12件あるモノが4件しかヒットしなかったケース。(もちろん現在では補充されている。筆者が学生を代表してカウンターの職員に通報した。)

Q1

Ref-1 REOスピードワゴンというロックグループの雑誌記事を探している。

「雑誌記事索引」といって、
「大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録」……高橋、女性誌、週刊誌などの要目
・「国立国会図書館」『雑誌記事索引』……学芸誌、専門誌、大衆誌などの要目
「REOスピードワゴン」はロックグループで、記事が載るとすれば……
1972年、安部、女性誌など → 72年、大宅…… 大宅1981
「大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録」の各ユニットをみると
・1888分(～1984)13冊……2件 (1981スピードワゴン)
・1985～1987年13 4冊……2件 } (大宅1981-スピードワゴン)
・1988～1989追補版1冊……8件 }
・1988～1995年10冊……0
・1996年～(CD-ROM)……0 45/12件ヒット
この質問は安部が掲載している雑誌の要目調査の要目と一致する。

②『草薨さん(SMAP)の薨という字の字源は?』という質問。もちろん同じ大修館書店の『大漢語林』で解決するが、「国字」に強いと宣伝している、いわゆる『諸橋大漢和』でヒットしないという。「おかしい?」と思いきや、書架を見ると、案の定『補巻』が補充されていない。刊行後数年たっているし、実際に

く使用されるので、これもカウンター職員に連絡しておいたが、これは未だ補充されていない。この調子だと、もしかすると『日本国語大辞典Ⅱ期』(小学館、13冊)の『別巻』1冊も補充されないのかも!? どうか?

Q2

Ref-8 薨(さむ)という字の字源を調べてほしい。
(SMAPの草薨さんの薨という漢字の字源を調べてほしい。)

・たいてい諸橋『大漢和』(大修館書店)にも出ていない!
（たいてい、近年の刊行本に『補巻』(1冊)は出ていない。
自前の『大漢和』の『補巻』の『補巻』はありますか?
確認し、見れば購入して下さい。）
・漢和辞典に無い ⇒ 『国字』(国語学)では? → 国字①
（この国字①のRef-bookは? → 『国語学』(大修館書店) 国字①
・国字①強い漢和辞典 ⇒ 『大漢語林』(大修館書店)
→ 国字①の国字①? → 国字①②
★『大漢語林』の中に……と
薨(さむ) 国字 (会意、漢省+萌、漢く萌るの意味を合せて、
2つ以上の漢字を合せて、新しい漢字をつくり、これの意味をもたせること。
「薨」の省略形の「萌」と、
「薨」を合せて
この漢字が判明するのは、
・『現代漢和辞典』(大修館) ・『漢和辞典』(大修館)
・『漢和辞典』(大修館)

3-3. OPAC検索力に?マーク

2002年後期の演習6回目のレファレンス質問No.4に、『マヌエル・プイグの小説『Boquitas pintadas』の邦題が判りますか?』というのがあった。これは「現物が図書館にあれば借りて帰りたい。」という事なので、シミュレーションでは邦題を確定したら所蔵状況調査も必要なレファ質問である。

翻訳書名『赤い唇』は、翻訳書誌ほか5～6通りの調査戦略と各々の典拠資料で容易に解決するが、All明治では「所蔵無し」と報告された。調査メモをみると、書名検索『赤い唇』でヒットするのは『赤い唇黒い髪』だけとある。しかし学生の1人は、『世界の文学19』(集英社、1990)〔和泉図書館・開架・908-97-W〕に、プイグの『赤い唇』が在中していることを人物書誌を使って見つけた。

つまり、明大OPACには合集・叢書内の固有の作品が、その書名からアクセスできないモノが混在している証拠だろう。すると、この様なケースには、自館OPACは二の次にして、NACSIS Web catや山の手線コンソーシアムでの検索を優先させざるを得ない。目録の信頼性にもかかわる重大事である。『赤い唇』だけのレア・ケースであってほしい。

Q-3

(Ref-4) マヌエル・プイグの小説『Boquitas pintadas』が94年どう新訳されたのか、邦題をしろ。

▶ 翻訳者探しのためのURLで1994年あたり載っているモノを手にする。
原綴が判明しているのだ……

- ① 『翻訳図書目録 92/96 IV 検索引』(別アソシエイト)を参照
「著者名索引」(原綴順とABC順)……Ⅲ-793 (巻末-Page)
「原綴名索引」……Ⅲ-12234 (巻末-文庫番を)

どうしても『赤い唇』(集英社・'94・298p. 野谷文昭文訳)に違いない

- ② 『翻訳小説全情報 93/97』(別アソシエイト)
p.748と67。表紙紹介あり。

③ ①・②が所蔵していないとすると……

- ③ ほかの大学図書館で新しい出版モノ

- ④ 出版書籍(元々は『出版情報』・Book Page本年版)・『白樺館総目録』(元々)の95年版を参照して、著者名をたよりに出版物を見つけた。『出版情報』・その中の……

- ⑤ 所蔵館の図録に載っている一冊を、その著者の……

(ふたつ、時分がわかる本は……)

- ⑥ 世界文学辞典と著者名索引で検索してみよう

元々は『世界文学辞典』の「プイグ」に
『赤い唇』・Boquitas pintadas (19) とある。

3-4. 書誌書目録の別置の怪

演習学生に限らず、図書館の一般利用者のセルフ・レファレンスは、先ずその主題(テーマ)の本棚をめざす。明治大学図書館ではメインフロア(1F)の参考図書排列群の該当書架を探すであろう。多くの学生はこの調査様式であるから、同一主題(テーマ)の参考図書が、書誌(文献リスト)という理由で同じ主題のタイプの違う参考図書と別置させられては、これは実際上非常に困ったことになる。調査メモを見て数多く感じたが、その後の調査進展に大きなマイナス効果を与えている。やはり『統計情報インデックス』は、『日

本統計年鑑』等が集中している350(統計)の棚にあると便利だし、『国文学年鑑』と『文芸年鑑』が近場に並んでいないと使いづらい。

参考図書と一口でいっても解説型と検索型とがあり、検索型をそのあつかう主題と関係なく集中させよう→これは図書館職員のための「棚づくり」である。解説型も検索型もその主題(テーマ)のもとに集中させる→これは利用者にとっては調べやすい・探しやすい排架法である。

3-5. デジタル移行資料に案内がない怪

NDLの『雑誌記事索引』・『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』・『日本書籍総目録』などを使用してカレントな情報が欲しい場合に、「デジタル移行」のサインとその後の指示・案内が書架上に見当たらない「棚づくり」は、実際には利用者をあきらめさせている。

4. おわりに

『レファレンスサービス演習』履修学生からの疑問・質問・感想を採集し、特に品揃え・棚づくりに観点をあえて考察した。

明治大学図書館(駿河台)は、コレクションも層が厚く、たいへん良い大学図書館であろう。ただ、この図書館の巨大な資源を十分に合理的に活用できる体勢が確立しているかどうか、特に分類付与と排架法には「?マーク」が付く。

開架フロアを走り回り、調査者の立場で「棚づくり」の重要度を知った履修学生の疑問・意見は貴重である。「聞いてくれれば……」の思いは図書館員ならば多かれ少なかれ誰でもあるのだが、しかしその思いが、逆に聞かなければ判らない「仕組み」を温存・看過している、と気付くべきある。

自館フロアにおける調べやすい「仕組み」や「棚づくり」は、現在と未来の利用者に対する現役図書館員の責務である。また、司書の専門性を賭して実行するルーティンワークでもある、と考えている。

〔注記・引用文献〕

- 1) 日本図書館協会・図書館教育部会2001年度研究集会(2001.12.22)における事例報告
- 2) 斎藤文男「三多摩レファレンス探検隊方式を用いた『レファレンスサービス演習』授業——明治大学司書課程の授業を例として——『図書館評論』43号:2002年7月。p.58-65
- 3) 江森隆子「三多摩レファレンス探検隊——できて1年、そして今——」『図書館雑誌』第89巻第2号:1995年2月、p.94-96
- 4) 阿部恵美子、鈴木直子「三多摩レファレンス探検隊の活動報告——1隊員からの報告——」『みんなの図書館』215号:1995年3月、p.48-58
- 5) 境美奈子「多摩地域公共図書館員によるレファレンス勉強会についての考察」(図書館情報大学平成6年度卒業論文)、1995年
- 6) 阿部明美「三多摩レファレンス探検隊の活動について」『図書館評論』36号:1995年、p.79-85
- 7) 斎藤文男、戸室幸治、森下芳則「東京・多摩地域における公共図書館員のグループ研鑽」『現代の図書館』34巻2号:1996年、p.63-66
- 8) 斎藤文男「レファレンス事例による研鑽と経験の蓄積・共有化——三多摩レファレンス探検隊の活動とその意義——」『情報の科学と技術』49巻4号:1999年、p.171-176

